

## ニヒリズムについて

善や正義、心理、美などは、すべて価値あるもの、追求し、実現すべきものとされている。通常、こうした価値は、これを価値たらしめている根拠があるとされている。たとへば、キリスト教は、全知全能である「神」の意にかなうことが善であると語り、プラトン主義者は、善のアイデアによってなにが善かが決まると言う。このように考えるとき、各人の行為が善である根拠は、各人が暮らしている「この世」の外にあるものによって与えられることになる。このように、現実世界の行為やものに価値を与える根拠が、別世界にあるという考えをニーチェは「二世界説」と呼び、現実の背後にまるで「後光」のように想定された世界を「背後世界」と呼ぶ。

ニーチェによれば二世界説や背後世界は誤りである。善悪は神やアイデアに由来するものではないからだ。むしろ善悪は現実世界内部の心理的、社会的メカニズムによって、生まれるものである。それを説明するのが次のような寓話だ。

あるところに、富、かつ平和を好む部族があった。そこからどこからともなく好戦的な部族が攻め入り、すべてを奪い去ってしまう。敗れた部族はどう考えるか。かれらは、何一つ落ち度のない自分たちをひどい目に遭わせた相手を「悪い奴ら」と呼ぶだろう。それにくらべ何も悪いことしてない自分たちは「善い人」である。こう考えれば、武器や知恵で太刀打ちはできない相手にせめて「道徳的」勝ることができ、それだけ相手に心理的優位をえることができる。こうした、弱者の強者に対する〈妬み〉や〈怨念〉（ルサンチマン）こそが、善悪という価値の根拠だと、ニーチェは言うのである。

弱者が自分たちの尊厳を守るために発明したのが善悪である。あたかも牛や羊などの家畜の群れが肉食獣の攻撃から身を守るために密集したむれをつくるように、弱い者達は強者から身を守るために身を寄せ合い、自分たちなりの尺度をつくる（しかも、一度浸ってしまうと、ルサンチマンは気持ちいい）。道徳は、このような畜群本能に由来する「奴隷道徳」というわけである。同じようなことは正義や禁欲といった、ほかの価値についても言える。

すべての価値はルサンチマンによるものだから、価値はない。価値というもの  
の価値を否定するのが、ニヒリズムだ。

一方、価値は世界の外部に根拠を持つものではなく、世界の内部における心理的、社会的関係から生まれた。そうとすれば、善悪の根拠として想定されたもの、すなわちアイデアや神はお役御免となる。

こうしてニーチェは、宣言する。

「神は死んだ」と。

[貫 成人 著『哲学マップ』\(ちくま新書\) >>>](#)

第六章 近代の不安より引用させていただきました。

[ドラマチック・リーディングの扉](#)

[『燈籠』 太宰治 作](#)

